

51. 新型コロナウイルス感染症流行下における認可保育園の現状（第3報）

楠 幸博、岡田 靖、小笠原由法

【はじめに】

新型コロナウイルス感染症は日本において2020年1月から流行が始まった。同年10月の調査では感染者が出た施設は約2%に止まった。21年10月の調査で新規感染者が出た施設は約50%に上ったが、大規模なクラスターはまれで、施設内の新規感染者は少人数に止まった。22年初めからオミクロン株が流行して、これまで以上に多数の新規感染者が報告されるようになった。今回、22年1月から9月までの流行状況やこの期間の保育園での問題点をアンケート調査した。

【方法】

22年10月札幌市認可保育園388施設の管理者宛にアンケート用紙を郵送し、FAXにて回収した。

【結果】

145施設から回答を得て回収率37%であった。合計園児数は12,219人、合計職員数は3,858人、新型コロナワクチン3回目を接種した職員は1,116人で全体の67%であった。第1に新型コロナウイルス感染症に新規に感染した園児数および職員数を調査した（表1）。新規感染園児が出た施設は144（全体の99.3%）、感染職員が出た施設は140（全体の96.5%）でほとんどの施設で新規感染者がでた。感染した園児は4,239人（全体の34.7%）、その中で入院となったのは3人（感染園児の0.07%）であった。感染職員数は1,116人（全体の29.0%）、その中で入院したのは5人（感染職員の0.44%）であった。第2に新規感染者数の月ごとの推移を調べた。BA1、BA2、BA5の流行に合

わせて2月、4月、8月に3つのピークが確認された（図1）。第3に1施設あたりの新規に感染した園児、職員の感染率にばらつきがあるのかを検討した（図2）。感染率を10%毎に区切ってその施設数を調べた。感染率は一桁から90%まで認めたが、20%から40%の施設が多いことを確認した。第4に保育園で発熱者が出た時の対応を聞いた。PCRをお願いするが49施設（34%）、迅速抗原検査をお願いするが37施設（26%）、受診を勧め主治医の判断に任せるが113施設（78%）であった。第5に22年8月から濃厚接触者の追跡が終了となった後、変化があったかを尋ねた。変化なしが39施設（27%）、事務仕事量が減少して楽になったが80施設（55%）、園内での流行収束が遅くなったが22施設（15%）、感染者の把握が困難になり困ったが22施設（10%）であった。第6

表1 保育園での新型コロナウイルス新規感染者数および感染率と入院率（22年1月から9月）

感染率＝感染者数/全体園児数（職員数）×100、入院率＝入院数/感染者数×100

	人数	感染率、入院率	21年度患者数（率）
新規感染園児数	4239人	34.7%	272人（1.3%）
入院園児数	3人	0.07%	6人（2.0%）
新規感染職員数	1116人	29.0%	130人（2.1%）
入院職員数	5人	0.44%	16人（12.0%）

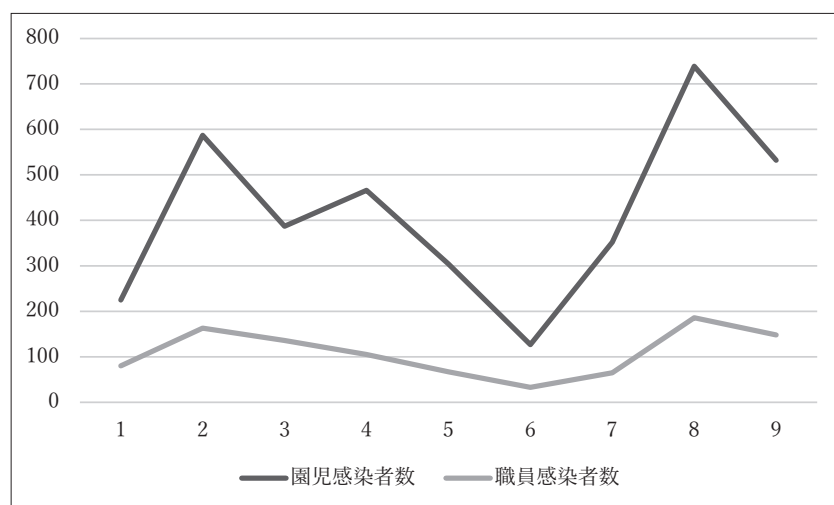


図1 新型コロナウイルス感染症の新規感染者数の月変動
縦軸：新規感染者数（人）、横軸：月（2022年度の1月から9月まで）

に22年1月から9月の間で、園内で問題となっている事を尋ねた。職員感染による人手不足が51施設(35%)、消毒作業に時間が取られるが44施設(30%)、保護者への説明に時間が取られるが16施設(11%)、行事が予定通りできないが56施設(37%)であった。

【考察】

勝田らの報告¹⁾によると、オミクロン株を含む変異株の流行により、小児における感染経路は家庭内感染から、学校、幼稚園・保育園での感染へと変化していた。

さらにオミクロン株の流行後、無症状患者は減少し、発熱、痙攣、悪心・嘔吐など症状の出現頻度が増加したと報告している。特に保育園児との関連では、オミクロン株流行において、感染経路が1歳から4歳までは55.6%は家庭内感染、24.2%は保育園・幼稚園感染であったと記述している。つまり保育園内感染が増加しているが、2倍以上家庭内感染が占めていることが重要と考える。今回の調査では感染経路を追跡できなかったが、札幌市内保育園間の感染率にバラツキを認め、その原因は主に保護者の感染率が関係していると考えた。札幌市こども未来局の指導があり保育園のマスクを含めた衛生管理は大きな差がないと考えられ、バラツキへの関与が少ないと考えた。

表1に示したように21年に比べて22年度は園児において感染率は大きく増加し約30倍になり、入院率は約30分の1だった。職員においても同様の傾向を認めた。全国の年代別感染率は永井らの報告²⁾によると21年12月29日から22年9月20日までで、0から9歳まで新規陽性者は10万人あたり約2.7万人となっている。今回の調査から札幌市認可保育園児10万人あたり約3.5万人と計算され、単純に比較できないが約30%程度多い新規陽性者数となっている。多さの原因として保育園内感染や大都市札幌の保護者の感染率が高いなどが推定された。

23年5月8日から新型コロナウイルス感染症は2類から5類に変更すると政府が発表した。この変更により保育園を悩ませている主な問題の清掃、行事、人手不足が改善されていくと考える。

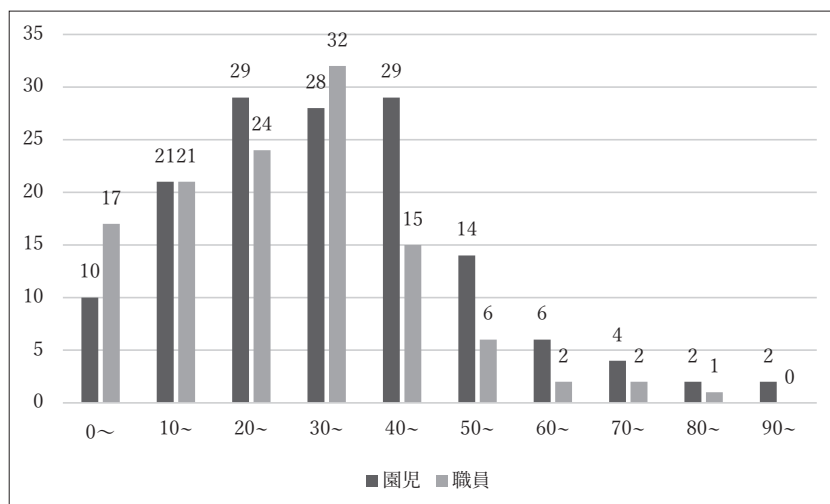


図2 新型コロナウイルス感染症の新規感染率(施設間)のバラツキ
縦軸：施設数、横軸：新規感染率(%) 10%毎にまとめて集計した。

またマスクを外すことで保育環境が元に戻ることが期待される。園児の年齢ではコロナウイルスに感染しても軽症であることが多いが、極めて稀に基礎疾患なく脳炎・脳症となり死亡した例が報告されているので注意が必要である。

【まとめ】

1) 22年1月から9月の間に保育園では、園児の約35%、職員の約30%が新型コロナウイルスに感染した。感染率は著明に増加したが、入院率は低かった。2) 新規感染者数の月推移はオミクロン株のBA1、BA2、BA5の流行があった2月、4月、8月にピークを認めた。3) 新規感染率は施設間でバラツキがあったが、感染率の20-40%の施設が多かった。4) 22年8月から濃厚接触者の追跡終了となった後、感染症について大きな変化なく事務作業が減少して楽になった。5) 感染職員が多数となったため、園において人手不足が起きた。

【参考文献】

- (1) 勝田友博ら. データベースを用いた国内小児新型コロナウイルス感染症の臨床症状に関する評価. 日児誌 2023; 127: 79-83
- (2) 永井良三、大林千一. グラフでみる人口で補正した年代別・都道府県別新規感染率. 2022
<https://www.covid19-jma-medical-expert-meeting.jp/topic/7400>